ふるさと安曇野
きのう きょう あした
No.15　2017.6.24

人の一生Ⅱ　私が嫁いだ日

三々九度　結婚式の当日、嫁が婚家に到着し、婿と盃をとりかわす（昭和28年　穂高）

現代では、「結婚（＝婚姻）」という言葉は多様性を持って使われています。男女の夫婦はもちろん、同性のカップル、入籍をしない事実婚の夫婦、入籍をしていても様々な事情で別居する夫婦など、結婚のかたちは人によってさまざまです。2015年４月１日に施行された東京都渋谷区の条例で、「区に在住する同性のカップルに男女の婚姻関係と異ならない程度の実質を備えたパートナーシップ証明書」を発行することが決定し、話題となったことは記憶に新しいでしょう。では、結婚を誓い合う結婚式や結婚を社会に認めてもらうための披露宴はというと、式場付きの専門の披露宴会場やホテル、レストラン等でおこなわれ、嫁と婿の親族はその会場で、半日ほどで式と披露宴を終わらせる「出会い婚」が主流となりました。結婚式・披露宴も人生における重要な儀礼として受け継がれつつも、個人の意思が尊重され、そこに地域やイエ（家）という概念はほとんど見られません。

しかし、かつての日本では、イエの繁栄に重きが置かれ、結婚はイエの存続のために必要不可欠なことと考えられていました。また、結婚はイエとイエとを結びつける意味合いが強かったので、互いのイエの格（経済力・家風・家の人の気質）などで決められることが多く、そこに本人たちの意思はほとんど反映されませんでした。結婚の儀礼も婚家と嫁の生家のしきたりに沿って、両家の関係を深めながら進められました。ここでは、主に昭和30年代の安曇野でどのように結婚の儀礼がおこなわれていたのか、女性が男性の家に嫁ぐ「嫁入り婚」を中心に見ていきましょう。

◆◆結婚への道のり◆◆

結婚適齢期になると　人は一生のうちにさまざまな儀礼を体験します。そのなかでも結婚相手を選択し、結婚するという事は、人生の一大転換期と考えられていました。成人して結婚し、子供ができてこそ一人前という考え方は昭和30年代になってもあまり変わらず、親や親族は子供が一人前になれば、どこの誰と縁組させるかということを、常に気にかけていました。現在は晩婚化が進んでいるといわれており、平成27年度の厚生労働省の調査によると、日本人の平均婚姻年齢は、男性が30.7歳、女性が29.0歳です。『三郷村誌Ⅱ第４巻　村落誌編』によれば、今からおよそ200年前の女性の嫁入りは14歳から22歳くらいまでで、そのうち７割は16歳から20歳までに嫁入りしていたといいます。昭和30年代はもちろん14歳で嫁入りということはありませんが、女性は20歳前後で、男性は青年組などの活動が終わる25歳前後で結婚していました。結婚するまでに男女とも肉体的・精神的・能力的に一人前になっているのが当然と考えられていました。女性の場合は学校卒業後、家事全体ができること、裁縫ができること、野良仕事ができることを目標に、親は子供のしつけをしたものでした。男性は米俵１俵担げる、わら仕事ができる、野良仕事や山仕事が人並みにできるなどのことが一人前の条件でした。もちろん、男女ともに性格が良く、まじめでよく働き、素直であることや、大酒を飲まないことなども評価の対象となっていました。昭和30年代には公民館活動などが盛んになり、女性も積極的に参加するようになりますが、20歳を過ぎると結婚を意識するようになったといいます。現在のように恋愛をして自由に相手を選んで結婚をするということはごく少なく、多くは見合いによる結婚でした。そのため、適齢期の子供を持つ親は、子供の結婚相手を、チューニンを介して探したり、折に触れて子供の話をし、それとなく探すようになります。

チューニンの活躍　結婚の仲介をしてくれる人のことをチューニン・ナコードなどといいますが、実際にどこの家にどんな娘・息子がいるかという話は、近所の世話好きな人がもって来たり、出入りの商人がもって来たりすることもありました。そうした話を聞いて、それぞれの親などが相手の家などを見に行ったり、その家の近所の人にどんな家でどんな人たちがどんなふうに暮らしているのかを聞きに行ったりもしました。これを「聞き合わせ」といいました。そして、あそこの息子・娘なら見合いをしてもいいだろう、という事になると正式なナコードを立てて見合いをします。チューニンは、ナコードともいいますが、オチューニンサマと呼ぶこともありました。嫁方・婿方双方でチューニンを立てますが、チューニンは本家筋の家や、ムラの有力者、仕事上の上司夫婦などに依頼しました。中には「結婚をいくつまとめた」というのが自慢だった人もいたといいますが、ただチューニンをするだけでなく、夫婦の後ろ盾（だて）となったり、夫婦仲の仲裁などもしなければなり

コラム①　見合い写真

女性は適齢期になると晴れ着で見合い用の写真を撮影しました。村の写真館や中には松本市の写真館へ行って撮影することもあったといいますが、男性の場合はスナップ写真が多かったといいます。縁談があると見合い写真が交換され、親が気に入り見合いまで進めば、縁談を断ることはできなかったといいますから、見合い写真を見るだけで結婚相手が決まったともいえます。

見合い写真
（昭和10年代　松本市）

ませんでした。ナコード口などといい、悪いところは見せないようにして話をまとめるのもナコードの腕の見せどころでもありました。昭和30年代も後半になると、見合いのような体裁を取りながらも実際には恋愛での結婚もみられるようになります。そのような場合には職場の上司などに形だけのチューニンになってもらうことがあり、「タテチューニン」といいました。タテチューニンの場合も結婚後の付き合いは続き、５年程は盆暮れに挨拶を欠かさなかったそうです。

中央の新郎新婦の両隣がハネオヤ、その両隣がチューニン
（昭和 50 年　堀金）

見合い　チューニンに紹介され、聞き合わせに行き、互いの親が「これなら」と納得すると結婚する当人に話し、本人同士が初めて顔合わせをする見合いに臨むことになります。恋愛結婚はほとんどなかった時代ですから、親から見合いの話があると、「ついに来たか」と覚悟を決めた人も多かったといいます。というのも、見合いをする頃には下話はかなり進んでいて、よほどでなければ断ることはできなかったからです。穂高から三郷に嫁いだＭさんは、昭和34年２月頃、小学校の恩師が家に来て見合い相手を紹介し、「どうですか。」といって父親に見てくるように言ったそうです。Ｍさんは正直結婚についてなにも考えがなかったので父親に任せると、相手は新宅（分家）だし家はちょうど建てている最中で、田んぼや畑ももらえるようだったので、いいじゃないかということになりました。しかし、兄嫁には「山つき（山の近く）の家だから大変だよ。」と言われたといいます。それから料理屋で見合いをしましたが、Ｍさんは父親と恩師の三人で、相手はチューニンと二人で来ました。相手と二人だけで話をする機会も設けてもらい、相手は登山の話をしてくれたと言います。仲の良い友達と槍ヶ岳に登った話をしてくれたので、山登りが趣味かと思っていたそうですが、その後結婚をしてみると、登山が趣味というわけでもなかったそうです。

結納　見合いをして相手がよいということになるとテジメといって、婿方から嫁方に酒を持参して、結納の日取りを決めます。これはチューニンが行くのが一般的でした。結納は大安などの良い日を選びおこないますが、昭和30年代までは婿本人が行くことは少なく、チューニンだけ、或いはチューニンと婿の父親などが嫁の家に結納の品を持って行きました。結納の品には三種・五種・七種などがありますが、大体は五種（ゴシュノモノ）で、ヤナギダル（家内喜多留・酒）、スルメ（寿留女）、トモシラガ（友志良賀・麻糸）、コンブ（子生婦・昆布）、スエヒロ（末広・扇子）で、これに目録や由緒書などが付けられます。結納にはかつては反物や帯なども贈られましたが、昭和30年代には帯料としてお金で贈られることが多く「結納を見てから嫁の支度を作

コラム② 見合い後の二人

見合いの後、結婚の約束をした二人はどうしていたのでしょう。安曇野では、松本などへ映画を見に行くことが多かったようです。現在のように、携帯電話はおろか、電話も各家にはなかった時代ですから、手紙をやり取りして約束したといいます。当時は映画観賞が流行していて、映画館でデートする姿を近所の人に見られることも多かったようです。「背の高い人で良かったね。」と言われたり、反対に「〇〇に来る嫁は背が高い。」などと噂されたことを結婚後に聞いたりしたそうです。

れ」などともいわれました。しかし、親は結納金の多寡にかかわらず、娘が恥ずかしくないように嫁支度を整えてやろうという思いがあったようです。親にとって娘の嫁入り道具を整えることは大変で、箪笥いっぱいの着物を準備するのが当たり前と考えられていましたから、娘三人いれば身上がつぶれるといわれたものでした。どうしても用意できない場合は、結婚式が済むまで近所の物持ちの家から借りるようなこともあったといいます。

コラム③　ハネオヤ

結納の頃にはハネオヤも決められます。ハネオヤは新宅ならば本家、本家ならば新宅で近しい年上の夫婦などを頼みます。結婚の仲介をするチューニンとは異なり、一生涯の付き合いをするからです。こうした血縁関係にない、婚姻関係などによって生ずる義理の親子関係を擬制親子といいます。新しい夫婦はハネオヤを「トーサン、カーサン」などと呼んで、生涯頼りにします。ハネオヤの方も新しい夫婦に子供が生まれたりした節目節目にはお祝いを届け、生涯後盾となって支え、時には嫁の相談相手になったりもしたものでした。

結婚式の朝、花嫁（右）とハネオヤ（左）
左手前は島台（昭和33年　三郷）

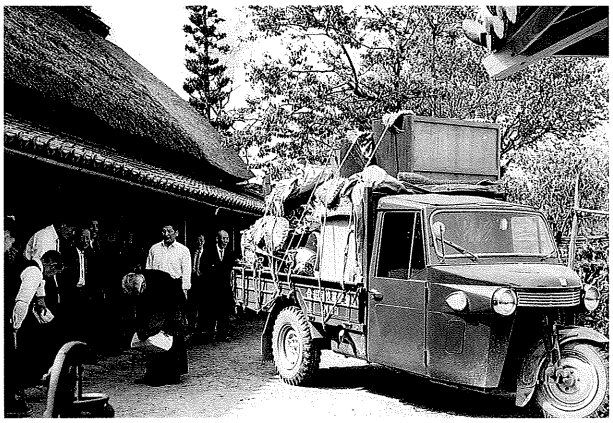
◆◆嫁ぐ日◆◆

結婚式場の変化　安曇野では、昭和30年代前半までは結婚式はほとんどが、自宅でおこなわれていましたが、昭和30年代も後半になると、料亭などで結婚式をおこなう家も出てき始めます。同時に生活改善運動の影響から公民館での簡素な結婚式もおこなわれるようになります。また、自宅での結婚式は神官などは介在せず、あくまで親族や地域の人だけが参加していましたが、昭和40年代以降は神社などでおこなう神官による神前式が主流になり、平成になると、教会などで牧師・神父が式を執りおこなうチャペルウェディングに変化していきます。こうした式場の変化に伴って、結婚式に参列する人たちも親族中心だったものから、友人や会社の同僚など、より広範囲の人々へと変化しています。

結婚式の朝　安曇野は農家が多かったこともあり、結婚式は農閑期におこなわれました。見合いが秋なら春、見合いが春なら秋に結婚式ということが多かったのです。結婚式当日の朝、「婿入り」がおこなわれます。婿は「セツ」と呼ばれる嫁方への土産として金一封や末広などを持参し、ハネオヤやロウトウと呼ぶ近親者などに付き添われて嫁の家へ迎えに行くのです。そして嫁の一族と対面し、親子・兄弟・親戚の固めの盃をとりかわし、その後、酒食でもてなされますが、この時嫁は顔を出すことはありません。嫁入りに先んじて婿入りがおこなわれるのは全国的なもので、「朝婿に夕嫁」などといわれます。『南安曇郡誌　第二巻下』にはセツが金一封になる前について、家によって差があるものとしながら、「米一駄・鮭一駄・ぶり二本・きじ二羽・するめ・こんぶ・麻・真綿・扇子等を贈った。」と記されています。さらに昔については、鍋借りといって料理人と共に酒やごちそうの材料を持参し、鍋などを借りて調理し、嫁の家族へ振る舞うことがあったといいます。

嫁入り道具　嫁荷と呼ばれる嫁の荷物は、結婚式の前日か当日の朝に運ばれます。自動車のない時代は、嫁の荷物が行列となって運ばれ、婿の家との中間地点や木戸などで、婿側に引き渡されました。昭和30年代になるとトラックで運ばれることが多くなり、結婚式の朝、嫁側のチューニンがトラックとともに婿の家に荷物を運び、婿の家で荷物の引き渡し

がおこなわれます。引き渡しは嫁側のチューニンが荷目録と箪笥の鍵などを、婿側のチューニンに渡し、荷がちゃんとあるかどうか目録を見ながら確認します。その後、嫁入り道具は箪笥の中まで婿の家の親戚や近隣の人にも披露されます。昭和28年に松本市から穂高に嫁いだHさんは、着物も洋服も全部タンスから出して披露されており、「ここの嫁さんの着物は化繊ばっかり、と思われたんじゃないかと思う。」と振り返ります。嫁入り道具は、親が娘に肩身の狭い思いをさせたくないという思いから、精一杯用意したものであり、同時に嫁の財産でもあったので、万一嫁が里へ返されるなどの際には、ひとつ残らず持ち帰るものでもあったのです。



嫁荷が婚家に到着する（昭和34年　三郷）

見立て　婿入りの一行が帰り、花嫁の支度が整うと嫁の家では近親や同姓などの親族を招いて「見立て」がおこなわれます。見立ては、嫁の一族や近隣の人々への花嫁の披露であり、別れの宴でもあります。この後、花嫁は生家を後にし、婚家で嫁入りの儀礼がおこなわれますが、そこに両親はついてはいきません。したがって、この見立てが花嫁との別れでもありました。見立てが終わりいよいよ生家を出る時には、花嫁は玄関からではなく、座敷口から出ていき、生家を出たところで、「再び帰らないように」と塩をまかれたりします。また婚家に入る際に花嫁の草履の緒を切って屋根に投げ上げたりするなど、葬送の儀礼とよく似たことをおこなうことで嫁は生家から婚家へ生まれ変わり、所属するイエが変わることになるのです。

見立ての宴（昭和34年　穂高）

嫁入り　見立てが終わるといよいよ花嫁は婚家へ向かいます。近くなら徒歩で向かうこともありますが、そうでない場合はタクシーで、婚家へ向かいます。花嫁とともに婚家へ向かうのは、父方のおじおばの代表、母方のおじおばの代表、兄弟の代表、同姓の代表、チューニン、そして婚家まで花嫁の介添えをするおばや兄嫁などで、一見（イチゲン）の客などといいます。一見とは初対面という意味で、この人数は婿入りの際の婿の一行の数と合わせ、５人や７人などの奇数であることが多く、もちろん、花嫁もこの日初めて婚家に向かうわけです。穂高から三郷小倉に嫁いだMさんは、「楡（三郷温）に親戚があったのでそこへ寄ってから婚家へ向かったが、どんどん山の奥へ行くので心配になった。」と、振り返ります。婚家に着くころには陽は傾き始めていますから、心細さに拍車がかかったのかもしれません。宵闇のなか、婚家の門口には提灯が灯されています。もともとは松明だったところもありますが、昭和30年代には提灯でした。タクシーで到着した花嫁はわら草履に履き替え、婿の友人や親族などの男性に抱きかかえられて玄関から入ります。履き替えたわら草履は玄関に入る前に横緒を引きちぎられ屋根上に投げ上げられます。玄関にあがると花嫁

についてきた親族から女性のハネオヤへと花嫁の介添えが移ります。嫁の一行は到着すると控えの間などに通され、ハネオヤへの挨拶などが済むと「落ち着きのおじや」が出されます。これは、遠くから歩いて嫁入りしていた頃の名残りと考えられますが、嫁はこの後の披露でもほとんど食事を口にすることができないので、腹ごしらえと共に支度を整えなおして式に臨むためでもありました。

コラム④　花嫁衣装

花嫁衣装は、時代によって移り変わります。昭和初期は黒地に松竹梅・鶴亀などの裾模様の入った着物を着ることが多かったのですが、昭和30年代になると総模様の振袖に打掛なども羽織った豪華な衣装へと変化していきます。当時、緞子の打掛が流行し、嫁入りの際に緞子の打掛を着た花嫁を隣村まで自転車で見に行った人もいます。また、この頃には婚礼衣装は借りて済ませることも多くなりました。

花嫁の姿　総模様の振袖に角隠しをしている
（昭和 28 年　穂高）

三々九度　花嫁はハネオヤに連れられ、控えの間から座敷へと移ります。引き茶、引き菓子（羊羹などに松竹梅が描かれているもの）が出され、チューニンが、花嫁やロウトウへ婿の家族・おじやおば、同姓の代表などの親戚を紹介し、婿方からの贈り物が披露されると、一旦それぞれの控えの間に下がり、その後、中の間か座敷で三々九度がおこなわれます。男蝶・女蝶と呼ばれる７，８歳の男女の子供が酒器に入った酒を新しい夫婦それぞれに酌をし、ハネオヤが介添えをして夫婦が三々九度をおこなうと、婿はその場を下がり、続いて嫁は婿の親・兄弟・親戚とそれぞれ固めの盃をとりかわします。現在は、神社での結婚式の際に三々九度がおこなわれますが、夫婦の三々九度の盃が済むと、双方の出席者に酒が注がれ、同時に酒を乾して両親・兄弟・親族固めの盃をします。嫁と婿双方の親・兄弟・親族が固い縁で結ばれることを願って、盃をかわすのです。

披露宴　三々九度が終わると、花嫁は控えの間に下がり、角隠しを取って打掛や紋付から、色留袖などにお色直しし、披露宴に臨みます。当時は結婚式や葬式など家で料理を出さなければならない場合は、料理人を頼むことが多く、親戚や近所の人などが手伝って給仕などもおこないました。花嫁はもちろん料理にほとんど口をつけることはありません。また、客へ出される料理も多くはオリ（折箱）に詰めて、持ち帰られるようになっています。これは、披露宴に出席した者が料理を家に持ち帰って家族に披露するためでもあります。披露宴では回し盃などされ、招待された客も酔いがまわり良い頃合いになると、花嫁は訪問着に着替え、一見の客などの列席者に酌をして回ります。これは、花嫁が婚家の者になったことのあらわれで、それを出席者に確認してもらう意味もありました。その後、頃合いを見計らって嫁側のチューニンから合図がされると夕食が出されます。料理人から「水のもの」と呼ばれる趣向を凝らした料理が出されます。これは嫁側の客から料理人に出したご祝儀に対する礼といわれています。こうして宴会が終わると「立ち端のそば」、「立ち端の酒」といって一見の客の去り際に冷たいそばと酒が出されます。立ち端の酒は、かつては大杯で出され、この酒を飲んで酔いつぶれ、介抱されたりすると後々まで語り草になることが多かったようです。しかし、この宴会で

互いの酒量や酒癖なども測られ、今後の付き合いの参考ともなっていくのです。花嫁は自分についてきてくれた一行を婿とともに見送ります。この時は、ついに婚家に自分一人が残されるので心細さもひとしおだったといいますが、この後もまだ、「あとふき」と呼ぶ直会があり、今度は嫁婿が残った婿の親戚や手伝いにきてくれた近隣の人をねぎらう仕事をしなければなりませんでした。宴会は夜が更けても続き、人々は夜が明けるころまで酒食と歌舞に興じました。

自宅での披露宴（昭和30年代　三郷）

◆◆夫婦になる◆◆

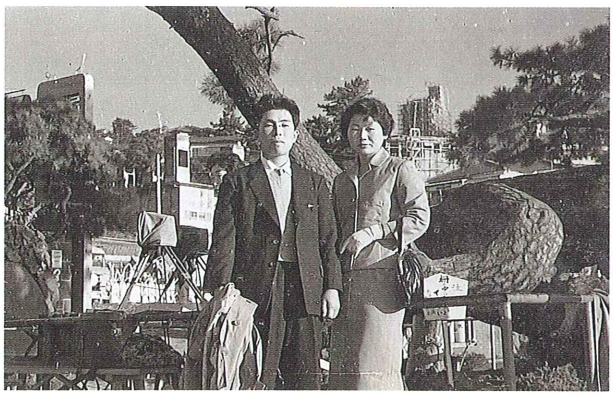
床入り　あとふきの途中、まだ宴が終わらない頃、女のハネオヤが花嫁を連れて寝所に下がります。着物を寝巻に着替えさせ床入りをさせるのです。婿も男のハネオヤが用意をさせるのですが、多くは酔った勢いで若衆などによって寝所に送り込まれたりしたといいます。かつてはハネオヤが、夫婦となったことを見届けていましたが、昭和30年代には形式的なことになっており、松本から穂高に嫁入りしたHさんは、結婚式の日は早朝から忙しかったのでくたくたで、床に入ってしばらくしてから夫も来たようだが、互いに疲れ切っていてすぐ寝てしまったといいます。また、昭和30年代初めごろからはあとふきの途中で、嫁婿が新婚旅行へ出かけることもありました。

嫁回り　結婚式の翌日、近所の人を招いてお茶を出します。この時のために嫁方は茶菓子を用意しておきます。お茶の後、朝食になりますが、朝食は披露宴の際、嫁の本膳に出された山盛りのご飯と腹合わせの鰯、根付きのネギ二本を水引で結んだものを、飯は握り飯ふたつにし、鰯は焼き、ネギはネギ味噌にして夫婦二人で分け合います。結婚後はなんでも二人で分け合うようにとハネオヤが用意してくれるのです。この日も「嫁見」などといって、近所の若衆などを招いて宴会をおこなうこともありますが、嫁は訪問着などを着て披露宴に来てくれた近隣をハネオヤなどと挨拶して回る「嫁回り」をおこないます。嫁回りには末広二本を持って行きました。宴に来てくれたお礼もありますが、結婚後の付き合いを覚える最初の一歩でもありました。

三つ目　結婚式から三日目には嫁の里へ夫婦二人で帰ります。三日目か五日目には必ず里帰りし、かつては二晩泊まるものでした。三つ目には嫁の里の家族それぞれに土産を持参しましたが、足袋などのような小物から反物などまで、家によってこの土産はそれぞれでした。そして、帰りには嫁の両親が婚家を初めて訪れました。これを「後たずね」といい、結婚式の翌日したものだというところもあります。結婚式場を利用するようになると、こうした婚家と嫁の生家を行き来する儀礼もおこなわれなくなっています。

新婚旅行　昭和30年代になると、式の後、新婚旅行へ行くことが多くなってきます。昭和30年代初めは浅間温泉（松本市）へ1泊とい

結婚式の翌日　嫁は後列右から2番目（昭和34年　三郷）



熱海への新婚旅行（昭和34年　三郷）

うことが多かったのですが、その後は熱海へ２、３泊と変わっていきます。昭和28年に浅間温泉へ新婚旅行に行ったＨさんは、家から駅まで徒歩で行く間、夫が「恥ずかしいからちょっと後ろを歩いて」と言ったが、浅間温泉へ着くと手をつないで歩いたといいます。Ｈさんは着物を着ての新婚旅行でした。昭和34年に結婚したＭさんは、熱海へ２泊で新婚旅行に行きました。この頃には女性はスーツで、新婚旅行へ行くことが多くなります。新婚旅行は日本の経済成長にともなって国内でも遠方へ、さらに海外へ行くことが珍しくなくなりました。現在のように夫婦の価値観に応じ、行く先もバイカル湖、チュニジア、ヨーロッパ一周など様々な選択がされています。また、新婚旅行という意味合いが薄れ、観光や趣味・レジャーなども兼ねた旅行へと変化していくのです。

結婚後の暮らし　結婚式は農閑期におこなわれることが多いのですが、特に春におこなった場合、式の後にすぐ田植えということも多かったのです。町育ちで田植えをしたことがないなどいう嫁の場合、慣れない田植えをしたり、それもできないとお茶番をするしかなかったということもありました。婚家のしきたりを覚えなければならないこともあり、嫁ぐ際に「三年はじっと我慢しなさい。」と里の親に言われたりしました。それでも子供ができない場合などは婚家に居づらくなったり、里へ返されたりするなど、女性にとって結婚することが必ずしも幸せとはいえないこともありました。しかし、男女ともに選択肢（せんたくし）がそんなにあったわけではなく、男も女も結婚をすることが当たり前、結婚をして一人前と考えられた時代でもあったので地域の中で生きていくために、我慢して結婚生活を続けたという人も少なくありませんでした。また、嫁の里との付き合いは結婚後も続き、結婚後一年間は節供や祭りの度に里帰りしますが、宿泊できる日数や土産物は自由にならず、婚家の母親の指図通りにするほかありませんでした。子供ができれば第一子の場合は実家で出産することが多かったので、嫁はことあるごとに実家を頼り、実家はそれに応えなければいけませんでしたので、長子が小学校に入学するぐらいまでは、何かにつけて嫁の里に経済的負担がかかりました。そんなふうに婚家と生家の往き来の中で折り合いをつけることを学びながら、嫁はだんだんに婚家の家風に染まり、地域社会の一員としても役割を果たしていける存在となっていったのです。

変わる結婚　ここまで見てきたような結婚にまつわる儀礼は、現在はほとんど見られなくなり、おこなわれていても形骸化して意味もわからなくなりつつあります。生活様式や社会のあり方の変化から親族や地域の人に頼らなくても暮らしていけるようになったことで、本来、互いの結婚を誓い合う結婚式や、親族や地域の人に結婚を認めてもらう披露宴が、人生のイベントへと変化しているのです。そして、結婚も当人たちの価値観が反映した多様なものへとなりつつあります。地域や親族とのかかわりが薄れゆくなか、結婚だけでなく家族のかたちそのものが揺らいでいるのです。

「ふるさと安曇野　きのう　きょう　あした№15」
編集　安曇野市豊科郷土博物館
発行日　平成29年6月24日
安曇野市豊科郷土博物館
〒399-8205長野県安曇野市豊科4289番地8
TEL：0263-72-5672　/　FAX：0263-72-7772
URL：http://azuminohaku.jp/